



Title	首領スノッリ
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	IDUN. 1980, 5, p. 64-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95879
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

首 領 ス ノ ッ リ

菅 原 邦 城

はじめに

1 13世紀アイスランドは、中世ヨーロッパにあって異例といえるまでに豊かな民族文学の興隆を見た。そして、この文学を代表する名に Snorri Sturluson がある。13世紀は他方、アイスランド人が国内の権力闘争を激化させ、その果てにノルウェー王に臣従してしまった時代でもあった。この独立喪失に重大な役割を演じたのが、上記 Snorri ら Sturlungar (ストゥルラー族) である——他ならぬ彼らの名によってこの時代は、アイスランドの歴史では、Sturlungaöld (ストゥラー族時代) と称されている。

この一族の名祖である Sturla Þórðarson (1115/16—83) については、既に本誌で紹介した。⁽¹⁾ここでは、Sturla の末息子 Snorri に的を絞り、ほぼ同時代の資料によって彼の生涯を要約する。Sturlungaöld のアイスランド内外における動きについて言及することは、紙幅の関係で困難であり、本稿末尾に付した略年譜から多少なりと推測され得る程度にとどめる。さらに専門的関心の向きは、他書につか⁽²⁾れたたい。

2 本稿の第一資料は、サガ集 *Sturlunga saga* の核心として、その半分ほどを占める *Íslendinga saga* 「アイスランド人のサガ」である。⁽³⁾このサガは年代的には、前記拙稿の中心資料であった *Sturlu saga* の続きをなし、現存のテキストでは1183年から1264年までを叙述する。その中、12世紀の十数年は極めて簡潔な要約であり、また最後の20年はメモ程の内容になっている。これに対して1200—42年の部分は、ストゥルラー族の諸豪族との勢力争い及び一族内部の訌争、そして Sighvatr と Sturla 父子の戦死と Snorri の非業の死を詳述する。

本資料はこうして、Sturlungaöld を知る最も重要な文献となっている

が、その作者としては、Sturla Þórðarson (1214—84) とするのが定説化していると言える。彼は Snorri の兄の子であり、自らも首領として時代後半の争乱に参加あるいは見聞する立場にあった。しかし *Íslendinga saga* は、作者が1人称(ek, vér)で自己の意見を洩らす数か所を除けば、極めて非個人的な印象を与え、少なくとも表面的には中立的、客観的な叙述に終始している。それにも拘らず、作者の人物や事件に対する個人的な感情や態度が随所に滲み出ていることも、容易に指摘できる。なお、この Sturla は叔父 Snorri と共に、13世紀アイスランドを代表する著作家であり法律家でもある。⁽⁶⁾

I. 1179—1206年

1 新興の首領 Hvamm-Sturla が波瀾に富む一生を終った1183年、彼の末息子 Snorri は5歳 (fimm vetra) であった (§1)⁽¹⁾。この二つの数字から単純に逆算すれば、Snorri の生年は1178年となる。確かにそれは、1197年に彼が19歳 (nítján vetra) だったとする他の記述 (§10) に符合する。しかしながら第三の記述 (§11) は、彼は1200年春に20歳 (tvítugr) だったという。この二つの相矛盾する記述だけから、一つの決定的な生年を導き出すことは不可能である。ところが、諸年代記によれば、Snorri は1179年に生まれたのである。⁽²⁾曖昧さの生ずる第一の原因に、年齢を数えるのに vetr「冬」の語を用いる古い習慣があるが、Snorri の生年に関しては、我々の資料を編纂した歴史学者によって、「凡そ」と留保されながらも、1179年が採用されている。⁽³⁾

2 1181年に Snorri は、南部地方 Oddi の首領 Jón Loftsson (1124—97) に養子として引き取られた (*Sturlu saga* §35)。そして、そのままこの地で成長し、1197年11月1日に「ヨーンが亡くなった時、スノッリは19歳だった」 (§10)。この年までの Snorri については、全く記述されていない。しかし、彼の成人後の活動を考えると、高度の技術が必要とする作

詩法、北欧古代の王家伝承と法律に関する知識は、⁽⁴⁾Oddi で身につけたとすべきであろう。Oddi の一族 (Oddaverjar) こそ、Sæmundr Sigfússon (1056—1133) 以来この国において学問を興隆させ、Jón の母がノルウェー王の庶子であったことやオークニーの支配者との姻戚関係も与って、王侯の出自を誇示していた人々であり、彼らの養子がそれらの知識を学びとったとしても、何ら不思議ではない。

Jón の死後まもなく、Oddi の新当主 Sæmundr Jónsson (1154—1222) と長兄 ⁽⁵⁾Pórðr (c. 1165—1237) が Snorri のため、Mýrar の豪族 Borg の Bersi inn auðgi Vermundarson の娘 Herdís (1233年歿) に求婚してやった。Bersi は「800フンドラズを所有していた。スノッリの方は無一文だった。それは彼の母「グズニユー」が、彼が父から相続した40フンドラズを使い果していたからである。その時グズニユーはフウムの屋敷をスノッリの婚資に提供して、結婚式はフウムでとり行われた。スノッリは母親と屋敷を共有するものと決められた」 (§10)。この結婚は、1199年の夏に実現している (§11)。

3 次の冬、Snorri は生涯最初の (と推定される) 争いに加わった。それは Oddi の Sæmundr がある人物の遺産をめぐる東部地方の Svínfell の首領 Sigurðr Ormsson (1235年歿) と構えた争いで、この時 Snorri は Sæmundr の代理人や使者の役目をするにとどまった (§11)。

この問題で、Snorri は次兄 Sighvatr (c. 1170—1238) とは反対の側についていた。この兄弟の対立は、今後時とともに著しくなっていく。なお、兄二人は既に1190年代に結婚と相続によって財産と首領の権力と支配地 (goðorð) を獲得して有力者に成長していた (§§4, 6)。

1201年に Snorri の義父 Bersi が死亡し、彼は妻と共にその屋敷と地位を相続して Borg に移り (1202年)、ここに数年住んだ。その頃南部の Garðar にいた母方の伯父 Pórðr Böðvarsson (1220年歿) は、甥 Pórðr が彼の部下 (þingmenn) に対する権力を侵害していると考え、これに対抗さすべくその弟 Snorri に Borgarfjörðr の Lundarmannagoðorð を半分

与えた。「しかしスノッリが部下を引き受けてしまった時、ソールズ・ボズヴァルゥソンには、自分の友人達をスノッリの方が兄ソールズが以前に攻撃した以上に攻撃している、と思えた。」 (以上 §15)

⁽⁶⁾
Pórðr Böðvarsson は、司祭 Magnús Pálsson のいる教会地所 Reykjaholt (現Reykjahlótt) に対して相続権を主張していた。

「スノッリ・ストゥルルソンはこの教会地所の入手を切望して、ソールズ及び相続権が一番あった他の者達から、地所に対する権利を手に入れた。彼はその後マグヌース司祭に、地所を手放すように提案した。そして双方は、スノッリが地所とマグヌース夫婦を引き受け、その息子達を、もしもそういう巡り合せであれば、成人するまで後見することで、意見の一致をみた。」それから Reykjaholt に移って (1206年頃)「彼は首領になった。というのは、彼は金にこと欠かなかったからである。」 (以上 §16)

4 Snorri がまだ Borg にいた頃、Orkneyjar (Orkney) から商船が来島して、その船長が冬を Borg で過ごしたことがあった。しかし、船長と主人の仲は気まずかった。特に屋敷教会の助祭が客の商品をその面前で盗むようなことをした時は、Snorri の異母兄 Sveinn が死の床で、一族の名を汚す悪事だと憤慨した程に、首領 Snorri は食欲であった。後にこの船長は助祭を殺して逃げ去るが、彼への復讐と保護をめぐる、Snorri と養家の主 Sæmundr の仲が悪くなり出した (§15)。このような Snorri の時宜を得ぬ食欲さはのちのち、人間関係にあって結局は彼に不利益をもたらすことになる。

「スノッリはすこぶる有能な財産管理者(fjárgæzlumaðr)で、また気が多くてヘルディース以外の女達と子供をなした。」嫡子の中、娘 Hallbera (1231年歿)と息子 Jón murtr/murti (1203—31) だけが成人に達した。そして庶子では、息子 Órækja (c. 1205—45)、娘達 Ingibjörg と Þórdís がいる (§16)。娘達の結婚はことに、Snorri の勢力拡張に重要な意義を持つようになる。

II. 1207—1217年

1 Sighvatr Sturluson の義兄で北部地方一の首領 Kolbeinn Tumason (c. 1173—1208) は、Skagafjörðr 東部の Öxnadalsheiðr 西方から Eyvellingagoðorð⁽¹⁾ に隣接する地域の goðorð をすべて握っていた。

「ソルステイン・イーヴァルゥソンはスノッリ・ストゥルルソンに、自分が所有する Eyvellingagoðorð を与えた。しかし「この goðorð を分有する」メルの人々は自分達の分は続けて所有した」 (§18)。こうして Snorri は一躍、北部地方西半部の首領となったのである。上述の荒野 Öxnadalsheiðr 北方の goðorð は Snorri の甥 Tumi Sighvatsson (1222年歿) が獲得し、そこには1215年次兄 Sighvatr 自身が移り住んで、次第に勢力を植えつけていった (§§29, 43, 95)。

アイスランド第二の司教座が1106年、北部地方の Hólar に置かれたが、その第4代司教は Guðmundr Arason (1161—;在職1203—37) である。彼は教会の自由、聖権の俗権からの独立を獲得するために闘い、その死に至るまで Kolbeinn, Sighvatr, Sturla 等々の有力者を敵にまわした。司教は教会破門宣告を、首領の方は追放判決を乱発し、更には双方とも武力衝突さえ辞さなかった。最初の大きな衝突は、1208年9月9日に起った Viðines の戦いで、これは Kolbeinn の戦死によって終わった (§§19—21)。Snorri が豪族側に立った Hólar の戦い (1209年) で司教座を追われて以後 Guðmundr は、アイスランドの司教を監督するノルウェー-Niðarós (現 Trondheim) の大司教とノルウェー王の力に依存した。これは教会の自由のためではあったろうが、かえって彼の祖国の独立を脅かす政策ともなった。

2 1215年 Snorri は、アイスランド唯一の公職である法の宣言者 (lög-sögumaðr) に選出された。その翌年、彼が最大の首領となっていた北部地方西半部にある Melr (Miðfjörðr) と Breiðabólstaðr (Viðidalr) の間に争いが起り、双方の要請に応じて「スノッリは彼らを和解に至らしめよ

うと努めたが、彼らはそれに同意を渋った。」そして武力衝突になる。「その時スノッリは彼らに向って、双方とも闘いを止めろと叫んだ。しかし、彼が何と言おうが、それを構う者は一人もいなかった。」Snorri はなお、闘っている両陣営を分けるように求められた時、「自分は、彼らの愚かしさと激情に対して割って入るに足る十分な手勢をもっていない、と答えた。」戦闘を目にしながら、首領に期待される役割を満足に果すこともなく尻込みして、ただ非難を受ける Snorri であった。しかし、後で調停に成功して首領の面目を保ったようである。(以上 § 33)

上の紛争に続いて⁽²⁾、大民会 (Alpingi) で Snorri の家人が司祭 Magnús Guðmundarson (1240年歿) を傷つけたことから、彼は Oddi の一族と争うやに見えた。しかし Haukdalr 一族 (Haukdælir) の首領 Þorvaldr Gizurarson (1235年歿) の仲裁もあって、Snorri は不満ながらも、Oddi の Sæmundr の裁定で和解した。その際 Sæmundr は Snorri ら兄弟について、「この兄弟は、まるで誰も彼らに対して思う所を貫けないとていうように、のし出してきている」と不快げに語っている。

Snorri は再び Magnús と、ある富裕な婦人の遺産をめぐる争う。先ず⁽³⁾1217年の春、Snorri は Magnús を追放刑に宣告させることができた。そして夏に、双方は武装して大民会に参集した。しかし、今回は Skálaholt (現 Skálholt) の司教 Magnús Gizurarson (1237年歿、上記 Þorvaldr Gizurarson の弟) の努力によって和解が成った。「この問題からスノッリは評判をとった。そしてこの問題で彼の評価はこの国で甚だ大きくなった。」(以上 § 34)

この評判は、法の宣言者 Snorri Sturluson が Oddi で学んだ(であろう)法知識を悪用して、Oddi の一族に働いた不正義の結実である。

3 「スノッリは秀れた詩人 (skáld) になり、手をつける事柄ことごとくに巧みで、またなされるべき事すべてについて最良の指示ができた。彼は〔ノルウェーの摂政〕Hákon galinn について詩を作り、jarl はこれに対して贈物、すなわち剣と冑と鎧をアイスランドに送って寄こした。」そし

て jarl は Snorri に、ノルウェー来訪をうながした。しかし、この旅は jarl の死（1214年1月）によって沙汰止みとなる (§ 34)。

III. 1218—1235年

1 Lögsögumaðr の任期が終った1218年の夏、Snorri はいよいよノルウェー訪問の旅に出かける。それに先立って長女 Hallbera を、南部地方 Brautaholt の豪族で資産家の Árni óreiða Magnússon (1250年歿) と結婚させた。ノルウェー到着後 Snorri は二人の支配者、即位まもない Hákon 王 (1204—; 在位1217—63) と王国の三分の一を支配して王位を窺う Skúli jarl (1240年歿) に歓迎されて、彼らと共に南の Túnsberg⁽¹⁾ で冬を送った。

翌年の夏 Snorri は、Hákon galinn の未亡人 Kristín 妃を西スウェーデンに訪問する。「スノッリは Hákon jarl のため、その依頼に従って彼女について Andvaka という詩を作っていた。彼女はスノッリを郑重に迎えて、数々の見事な贈物を彼に与えた。彼女は、スウェーデン王エイリーク・クヌートソンが所有していた軍旗を彼に与えた。」そして秋にはノルウェーに戻り、次の冬もノルウェーの支配者達と共に Þróndheimr にいて、特に Skúli jarl から厚遇された (§ 35)。

2 1216年にアイスランド人（中でも Oddi の Sæmundr）とノルウェー人（Björgyn=Bergen のハンザ商人）の間に発した敵意が、この頃には殺傷事件にまで発展して深刻になっていた。そして1220年春ノルウェー宮廷では、懲罰のため夏にアイスランドへ軍隊を向けることが決せられた。⁽²⁾

「スノッリはこの遠征の中止を強く勧めて、アイスランドの最良の人士を味方にする方が良策であることを語った。そして自分は、自分のことばでもって早急に、ノルウェーの支配者達に服従 (hlýðni) するのが人々にとって適切だと思うように仕向けることができると言った。彼はまた、セームンドを別にすれば、現在アイスランドでは自分の兄達以上に強力な

者は他にないとも言い、自分が帰国したとき兄達は自分のいうことに従うだろうと語った。このような説得に、jarl の心は静まっていった。」そして少年王 Hákon の判断⁽³⁾で、アイスランド討伐の計画は放棄された。それから Snorri は、王と jarl の lendr maðr⁽⁴⁾ にされたが、これは何よりも jarl と Snorri 二人の考え(ráð)であった。「そしてスノッリはアイスランド人に対して、彼らがノルウェーの支配者に服従するように試みるものとされた⁽⁵⁾。スノッリは息子ヨーンを人質としてノルウェーに送り、これは人質として jarl のもとに滞在することとされた。」

並外れた王侯の誉れに浴して帰国した Snorri に対する同胞の反応は、疑惑と不信に満ちていた。 (以上 § 38)

しかし、Snorri は息子を人質に送ったのみで (§ 41)、もう一つの肝腎な約束を実現しようと努力した形跡はない。⁽⁶⁾

3 1222年11月7日、Oddi の首領 Sæmundr が病死した。彼は生前、娘の Solveig も息子達と同等に遺産相続をすることにしていた。息子達は、かつては同家の養子であった Snorri に遺産分割を委任するが、彼は、「話し相手にして面白く思った」Solveig に、彼女が手をのばす物は何でも与える程あまかった。Snorri はこの折、Oddi に来訪する途中「当時アイスランドで最も富裕であったハルヴェイグ・オルムスドットイル」に出会ったが、若い Solveig に比べてさほど魅力を感じなかったようだ (§ 49)。

この頃長兄 Þórðr と Snorri は珍しく仲違いをしたことがある。それは、1221年11月に他界した母 Guðný の遺産が原因だった。彼女は Snorri の屋敷で亡くなったが、自分のかなりの財産は自分が育てた孫 Sturla Þórðarson (Snorri の甥) に贈ることにしていた。しかしそれを、彼女を引きとっていた Snorri が手放さなかったのだろう。彼には、かつて父の遺産を母によって浪費された恨みもあったであろう。しかし、Þórðr の庶子達の面倒を Snorri が見る約束で、兄弟は以前の仲に戻った (§ 52)。

1224年春、Snorri は下に触れる Kolskeggr の遺産に関連して Þorvaldr

Gizurarson に約束したように、娘 Ingibjörg を後者の息子 Gizurr Þorvaldsson (1209—68) に与えることにした。二人の結婚式は夏に行われた (§ 52)。秋には娘 Þórdís と Þorvaldr Snorrason (1228年歿) を結婚させる。Þorvaldr は、西部地方の豪族 Vatnsfirðingar の首領で、この結婚によって、従来から同盟関係にあった Sturla Sighvatson の不信を招くが、Snorri との対立 (§ 51) は解消したのである。さらに1228年の冬、北部地方 Skagafjörður 一帯の goðorð を占有する豪族 Ásbirnigar の若い首領 Kolbeinn ungi Arnórsson (c. 1208—45) が Reykjaholt を訪れて、Snorri の娘 Hallbera に求婚し、二人の結婚式は直ちにとり行われた (§ 63)。

1224年 Ingibjörg の挙式に先立って、Snorri 自身は未亡人 Hallveig Ormsdóttir を、双方の財産を共有する約束で Reykjaholt に迎え入れた。彼女は、二人の息子の母親だが、前述のように、当時アイスランドで一番富裕な女性であり、この頃はまた、その母の兄で長者と綽名された Kol skeggr Eiríksson の資産をも相続していたのである (§ 52)。彼女は、Snorri の養父 Jón の庶出の孫でもある。この同棲によって「スノッリは当時アイスランドで他の誰よりも財産を所有していた。しかし、このことで兄ソールズの賛同は得られなかった。その兄は、彼を害するものが水であれ人であれ、これは彼の死に至るのではないかと心配するのだ、と語った」 (§ 53)。

4 1228年 Snorri が Reykjaholt の温泉風呂につかっていた頃は、「スノッリがもつ強力な姻戚関係のために彼と競える首領はだれもない」 (§ 64) ように見えたが、彼に優るとも劣らぬ野心的な若い首領が身内から現れ出た。それは Snorri の次兄の子 Sturla Sighvatsson (1199—1238) である。彼は父の寵児で、20歳にして Sauðafell の屋敷と goðorð を与えられ、前段はじめに述べた Solveig Sæmundardóttir との結婚に際しては、一族共有の Snorrungagoðorð を婚資に貰った。最後の一方的な処置に対して、彼の父の兄弟 Þórðr と Snorri は大いに不満であった (§ 52)。

そして、この goðorð をめぐって伯叔父と争うことを余儀なくされ、1227年春の民会でこれを強奪された。Sturla は Þórðr には暴力をもって報復したものの、Snorrungaoðorð そのものはその三分の一は Þórðr に、三分の二は Snorri の息子 Jón murtr の所有に帰することになった (§ 62)。

5 1229年 Snorri は、息子 Jón から婚資として Stafaholt の教会地所と財産の譲渡を求められた時、これをすげなく拒否し、父親の所有物ではなくて母親の所有する Borg を継げ、と言いつ渡した。息子は父親の態度に絶望してノルウェーに出かけてしまう。彼の出国することに Snorri は大いに狼狽するが、それは後の祭りだった (§ 75)。Jón は Skúli jarl の従士団で skutilsveinn⁽⁷⁾ に登用されたものの、1231年1月泥酔の果てに命を落してしまう (§ 79)。

1228年の夏、Snorri の友人で婿の Þorvaldr Snorrason は、彼が5年前に殺害した Hrafn Sveinbjarnarson の息子達によって襲われ、焼殺された (§ 67)。この敵対しあう両家の一方に、それぞれ Snorri と Sturla が加勢をしたのである。そのために、肉親二人の関係は悪化する (§§ 70—77)。そして、この叔父と甥の関係がその最悪の頂点に達するのは、1229年の大民会においてで、Snorri は長兄 Þórðr 父子の支持を得て、最大の軍勢を誇示した。この折 Kolbeinn ungi Arnórsson は、義父 Snorri に次ぐ手勢を従えていて、Sturla からその支持を求められていた。彼は妻 Hallbera とは大民会の後に別居し、彼女は母の住む Borg に去って、2年後に病死する。夫はその訃報に接するや直ちに Oddi に赴いて、Helga Sæmundardóttir を妻に得た (§ 81)。Snorri の他の娘 Ingibjörg も、この年ノルウェーから帰国した夫 Gizurr Þorvaldsson と離婚している (§ 82)。

娘 Hallbera の死によって Snorri は、彼女の相続人になった。そして彼女が夫と共有していた財産と goðorð の半分を Kolbeinn ungi に要求するが、後者は応じなかった。1232年の大民会で双方の友人達が調停に努めて、以下の諸条件で和解が成った—— (1) Kolbeinn が正当に所有する

goðorð の半分を Snorri に与えること、(2) K.は民会へS.に同行して彼を支持すること、(3) もしもS.が欲すればK.は彼に幾分かの金を支払うこと、(4) K.は妹 Arnbjörg を60フンドラズの持参金と共にS.の息子 Órækja に妻として与えること、(5) S.は Órækja に200フンドラズと Melr の教会地所および goðorð „Hafliðanautr“ を与えること、(6) 義理の兄弟二人は北部地方において共同してことに当ること—— (§ 86)。

上記の条件のうち、(5)にある Melr と goðorð を Snorri はまたしても手放そうとせず、Stafaholt の教会地所を与えることにした (§ 87)。Órækja が是非にと望んだ Stafaholt もしかしながら父は与えようとせず、その代り、娘 Þórdís が亡夫のあと取りしきっていた Vatnsfjörðr を奪うようにして Órækja に渡し、彼をそこの首領にした (§ 90)。

6 Sturla Sighvatsson は、特に Hólar の司教 Guðmundr に対する敵対行為——多くは武力行使——のために、1226年以降再三再四ノルウェーの聖俗両界の支配者達から召換を受けていた。ようやく1233年の夏、彼はノルウェーに赴き、そこで彼よりも数歳若い Hákon 王の知遇を得る。さらにローマ教皇に謁見して、父と自身の罪を許され、1234年の秋ふたたび Hákon 王の宮廷に戻った。そこで「王とストゥルラはしばしば語り合った」 (§ 92)。Sturla は王と交した言葉を胸に秘めて、1235年帰国するが、「王とストゥルラは、彼がこの国を征服して王のもとにもたらし、王の方は彼をこの国を治める首領にすると計画を立てた。王はその際、ストゥルラに何よりもこの国で人殺しを増加させず、むしろノルウェーに追放するよう注意した」⁽⁸⁾ (§ 139)。

1230年代も半ばになると、支配豪族の間に世代の交代が認められ、今後は若い首領の力による勢力争いがますます激しくなっていく。とりわけ Sturla は父 Sighvatr の援助を受けながら、すべてに優先する権力追求を加速度的に押し進め、Hákon 王の忠告にも拘らず殺人を繰り返す、そして遂には自身の破滅を招く事態に至る。こうして武力衝突が支配的な時代にあって、策略を得意として武器に訴えることを好まない Snorri Sturlu-

son は、不肖の子 Órækja の思慮を欠く行動のせいもあって、徐々に権力を失っていく。Sturlungaöld の争乱が極点に達した観のあるこの時期のアイスランドは、まさに「戦斧の代、剣の代、嵐の代、狼の代」⁽⁹⁾を迎えていたのである。上に立つ首領の争いには、倫理的、道徳的な抑制は徹底だに働かなかった。Snorri は1234年夏、かつての婿 Kolbeinn ungi から南部地方の所領を掠奪された (§ 102)。また彼の愛児 Órækja⁽¹⁰⁾ は愚かしくも、平和を好む伯父 Þórðr 父子を不当に取扱い (§§ 101, 103), さらに1235年には、伯父 Sighvatr から強制されたとはいえ、己が父をも攻撃しようとした (§ 110)。

7 1230年の夏は、アイスランドは久しぶりに平和を味わった。Lög-sögumaðr の Snorri は大民会には代理を遣って屋敷に留まり、そして大作のノルウェー王朝史 *Heimskringla* を完成しようとしていたと思われる。「スノッリとストゥルラ [Sturla Sighvatsson] は長い間レイキャホルトに滞在して、スノッリが纏めた本によってサガ諸本 (sögubæk) を書き写させることに大いに意を用いた」⁽¹¹⁾ (§ 79)。Snorri と Sturla Sighvatsson, Snorri ら三兄弟の間柄は、こうして翌1231年には肉親にふさわしいものへ変っていた (§ 80)。

IV. 1236—1240年

1 1236年早々、Sturla は父 Sighvatr の支援のもと、Hákon 王との密約を実行に移すべく、北部地方で軍勢を準備した。内通者から上のことを知らされると、Snorri は息子 Órækja や長兄 Þórðr らと対抗措置を協議する。そして Órækja ら強硬派が先制攻撃を主張した時、「スノッリは、この頃迫っていた祝祭」⁽¹⁾に自分の兄を攻める 覚悟はなかった。」その結果、和解を求めて使者を北部地方に送った (§ 112)。

一方、北部地方ではシュロの聖日の前週に大軍が召集された。これを知っても Snorri は手勢を集めることもせず、Reyjaholt は兄 Þórðr に譲

って、南部の Bersastaðir (現 Bessastaðr) に難を避けた。そして Snorri と Órækja 父子の本拠地 Reykjaholt と Vatnsfjörðr は、シュロの聖日 (この年は3月23日) と復活祭の聖日 (3月30日) に Sighvatr 父子の奪うところとなった (§§ 113, 114)。Snorri はその翌年春まで、Reykjaholt に居を移した甥 Sturla を恐れるかのように、東部地方第一の豪族 Svínfellingar の首領 Ormr Jónsson (1241年歿) や、南部地方 Reykir に住む首領 Gizurr Þorvaldsson のもとに身を寄せていた (§§ 114, 116)。この Gizurr はかつて Snorri の女婿であった人物であるが、この頃には、Hákon 王も行きすぎと考えたような強引⁽²⁾さで全アイスランドを己が傘下に納める勢いであった Sturla Sighvatsson さえ、容易に負かすことのできない数少ない首領の一人となっていた (§ 121)。

1237年4月、南部地方の首領 Þorleifr Þórðarson (1257年歿) と Snorri は反 Sturla 同盟を結び、手勢を合流させる。しかし、戦略をめぐる両者の意見が対立して、Snorri は自軍を引き揚げてしまった。Þorleifr 達はそのまま Sturla 側と戦って惨敗を喫し (Bær の戦い)、死傷者は多数、そして首領らは国外追放にされる。この圧勝によって Sturla は西部地方から南部地方の Borgarfjörðr に及ぶ広い地域を支配することになった (§§ 123—124)。一方 Snorri は夏に、甥 Sturla から逃げる形でノルウェー⁽³⁾に出国し、Skúli hertogi の庶子 Pétr のもとにあった (§ 126)。

2 アイスランドで Sturla Sighvatsson が全島の半ば以上を手中に入れたことは、南北両地方の最有力者 Gizurr Þorvaldsson と Kolbeinn ungi Arnórsson を同盟させる結果となった。1238年夏に双方の武力行動がエスカレーションの一途を辿り、8月21日の土曜日、Sighvatr の屋敷付近の囲い地 Örlygsstaðir で両軍は激しく衝突し、Gizurr-Kolbeinn 側が勝利し、老 Sighvatr と野心家 Sturla は戦死した (§§ 129—138)。これは、Sturlungar の急速な没落の出発点となったのである。

兄 Sighvatr 一家仆るの報は、同じ年の秋になって、ノルウェーにいる Snorri のもとに届いた。彼は兄の死を悼むと同時に、自分の再起のチャ

ンス到来と考えたものと思われる。Hákon 王はこの冬、自己の秘密の代理人 Sturla の死とその後の事態にかんがみて、Skúli のもとにあったアイスランド人全員に翌夏出国することを禁じた。ところが Skúli は Snorri 達に出国を許したばかりか、航海する船まで贈る。そして船が海上に乗り出そうとした時、アイスランド人は、再び出国禁止の勅書を示された。王臣 *lendr maðr* の Snorri Sturluson は王命を無視した——『私はアイスランドに行く』(„Út vil ek“.) (*Hákonar saga* § 195)。

同行のアイスランド人達は確認しないが、Skúli hertogi は送別の宴で Snorri に *jarl* の称号を与えたという (§ 143)。

3 1239年秋から Snorri は、Órækja や Þorleifr 等とはかって、失地回復を急速に進め、ほぼ1年で西部地方の大部分を奪い返した (§ 145)。しかし、Órækja の横暴が災いして、Snorri は息子の住民に対する姿勢を嫌い、Þorleifr も Órækja と対立していくようになる。

1240年夏、Snorri のかつての義息 Árni óreiða Magnússon が王の密書を携えて帰国した。密書の内容を知る者は、受取人の Gizurr Þorvaldsson 等ごく少数だった。この年の5月ノルウェーでは、Hákon 王の幼少の頃からその王権を脅かしてきた義父 Skúli hertogi が反乱のうちに仆れていた⁽⁴⁾のである。(以上 § 146)

V. 1241年

1 1241年7月25日、Snorri の妻 Hallveig が死亡した。彼女の息子 Klængr と Ormr は継父 Snorri に、母の遺産の半分を要求する。しかし Snorri は土地を手放す意志は全くない——「彼らは貴重品と書物は分けたが、土地については何事も決められず、両者それぞれ自分の考えを譲らなかった。」Snorri の理不尽に不満な「兄弟が南にやってくると、彼らは[叔父] ギツル [ソルヴァルドソン] に会った。ギツルは、兄弟がスノッリと正当な分与を行えないのは宣しくない、二人にこの件で力を貸そう、

と語った。」

(§ 149)。

Gizurr は夏、手もとに人々を召集した。「そこにはクレーングとオルムの兄弟、司教の子ロフト、アールニ・オーレイザがいた。その時ギツルは、エイヴィンドとアールニがアイスランドに携えきたった [Hákon 王の] 書面を公けにした。書面にはこう認めてあった——スノッリは王の禁止の中アイスランドに赴いたため、ギツルはスノッリが好こうと好くまいと彼をノルウェーに赴かせること、或いはそれが叶わぬならば彼を殺すこと。Hákon 王はスノッリを自分に対する反逆者と呼んでいた。ギツルは、自分は決して王の書面に背くつもりはないと語った。そして、スノッリが進んでノルウェーに赴かないだろうことを承知している、と言った。続けてギツルは、自分はスノッリを捕えに出かける考えだと言った。」 Snorri の継息 Ormr は、Reykjahlolt での養育の恩を感じてこの遠征に参加しなかった。⁽¹⁾

2 Gizurr は70名以上の手勢を率いて、「聖マウリティウス祝日の翌夜レイキアホルトにやってきた。彼らは、スノッリが休んでいた離れに押し入った。しかし彼はとび起きて離れを出、これに隣りあった小さな建物にとび込んだ。そこでアルンビョルン司祭に出あい、ことばを交した。二人は、スノッリが建物の物置の下にある地下室に入ることに決めた。

ギツル達はスノッリを捜して建物をまわった。その時、ギツルはアルンビョルン司祭を見つけ、スノッリがどこにいるか尋ねた。司祭は知らないと言った。するとギツルは、もしも自分達が顔を合わせなければ和解することができないのだが、と語った。司祭は、スノッリに身体安全の保証が与えられるならば、彼はあるいは見つかるかもしれないと言った。このあと彼らは、スノッリがどこにいるか判った。そしてマルクース・マルザルソン、シーモン・クヌート、アールニ・ベイスク、ソルステイン・グジナソン、ソーラリン・アースグリームゥソンが地下室に入っていった。

シーモン・クヌートがアールニに、彼を叩斬れと言った。

『斬ってはいかん』とスノッリが言った。

『斬るんだ』とシーモンが言った。

『斬ってはいかん』とスノッリが言った。

このあとアールニが彼に最期の傷を負わせたが、ソルステインと二人して彼を傷つけたのだ。」
(以上 §151)

こうして、アイスランドの権勢家 8 人の 1 人に数えられた⁽²⁾ Snorri Sturluson は、1241年 9 月23日の夜半、抵抗することなく殺されたのである——かつて長兄 Þórðr が予感したように (§ 53)、人の手にかかって。Snorri の命の補償は Kolbeinn ungi によって200フンドラズと決められ⁽³⁾るが、これを Órækja は、自分の負担すべき賠償と相殺された (§ 157)。また Snorri に直接手を下した者達は、彼の一族郎党から血の復讐を受けることになる (§ 173, *Þórðar saga kakala* § 16)。

(2.9.1980.)

注

はじめに

- (1) 「スノッリの父ストゥルラ」IDUN III (1976), pp. 61—90. [以下では、拙稿と略称。]
- (2) 例えば Jón Jóhannesson: *Íslendinga saga* I. Þjóðveldisöld, Reykjavík 1956 [ノルウェー語訳: *Islands historie i mellomalderen*. Oversatt av H. Magerøy, Oslo/Tromsø/Bergen 1967, 英語訳: *A History of the Old Icelandic Commonwealth*. Transl. by Haraldur Bessason, Winnipeg 1974], Sigurður Línal (ritstjóri): *Saga Íslands* I—III, Reykjavík 1974—78 の該当箇所を参照。
- (3) 使用した刊本は、*STURLUNGA SAGA*. Jón Jóhannesson, Magnús Finn-bogason og Kristján Eldjárn sáu um útgáfuna, I—II, Reykjavík 1946 [St. と省略] の I, pp. 229—534. なお、原語から直接の引用は、上記拙稿と同じ方法で示す。
- (4) サガ全体(就中1225年以降の部分)が Sturla の手になるものか否かについては、諸説あり (Cf. Jakob Benediktsson: *Sturlunga saga, Kulturhistorisk*

leksikon for nordisk middelalder fra vikingetid til reformationstid XVII (København 1972), 357)。

- (5) *Sturlunga saga* のいわゆる *Formáli* 「序文」によれば、詩人 Sturla skáld Þórðarson は「アイスランド人のサガ」(*Íslendinga sögur*) を口述するにあたって、「彼の初期の頃に生存していた 賢明な人々の知識を有し、そして一部は、サガが物語っている出来事と同じ時代にあった人々が書いた文書 (bréf) によった。多くの事柄、即ち彼の時代に大事件となった事柄は彼自身が見たり聞いたり出来た」(*St.* I 115)。
- (6) 彼は更に *Hákonar saga Hákonarsonar*, *Magnúss saga lagabætis* を執筆し、*Landnámabók* 校本 (*Sturlubók* 「ストゥルラ本」) と *Kristni saga* をまとめた。また物語りの才能によってノルウェー王 Magnús と王妃の知遇を得て、上記の国王父子二代のサガを著し、豊かな法知識のために初代の法官 (*lögmaðr*, アイスランドにおけるノルウェー王の官吏) に任ぜられてもいる。

I.

- (1) *Íslendinga saga* への参照指示は、章番号のみによって、サガ名は省略することにする。
- (2) Cf. *St.* I 555, note 1: 1.
- (3) この年が定説化していることは、例えば昨1979年にアイスランドで Snorri 生誕八百年の記念が行われたことから窺えよう。
- (4) Snorri は稀に *inn fróði* (学者) と呼ばれる (*Svinfellinga saga* §3: *St.* II 89)。
- (5) 本稿では便宜上、Snorri と母を同じくする二人の兄 Þórðr と Sighvatr をそれぞれ長兄、次兄と呼ぶことにする。彼らには多くの異母兄がいる (拙稿 II, 2 参照)。
- (6) 彼の父は Snorri の父と争った Páll Sölvason である (拙稿 VI 参照)。

II.

- (1) *Ævarr gamli* の子孫——特に有名なのは Hafliði Másson (1130年歿) ——が有した *Æverlingagoðorð* が³、正しい訓みとされる (*St.* I 556, note 18: 2)。しかし、Sigurður Nordal (*Snorri Sturluson*, önnur prentun, Reykjavík 1973, 14) は若干の伝本に認められる *Ávellingagoðorð* の形を採り、一方 Jón

Jóhannesson (*Íslendinga saga* I 279) は両方の形を挙げている。

- (2) *St.* の編者は、「1216年(?)」とする(*St.* I 267, margin)。
- (3) *St.* の編者は、「1217年(?)」とする(*St.* I 268, margin)。

III.

- (1) Cf. *Hákonar saga Hákonarsonar* (ICELANDIC SAGAS II. Hakonar Saga and a Fragment of Magnus Saga with Appendices. Ed. by Gudbrand Vigfusson, London 1887, pp. 1—360) §§ 55—56. このサガは、同じ Sturla Þórðarson が、ノルウェー王 Magnús Hákonarson (1238—; 在位1257—80) の要請でまとめた(本稿はじめに注(6)参照)、王の側に立つ公式記録の性格を有し、王と対立する勢力が否定的に叙述されていることは否めない。
- (2) Skúli jarl が軍事遠征の発案者だとも語られている(*Hákonar saga* §59)。
- (3) *Hákonar saga* §59 による。
- (4) これは、konungr (王), jarl (公) に次ぐ称号であるが、1277年 Magnús 王によって baron と改められた。王への奉仕に対して王領を封土として与えられたとされる。後に Hákon 王は反逆の王臣 Snorri の殺害にともなって彼の遺産に対して所有権を主張したとされるが(*Þorgils saga kakala* §10: *St.* II 118), この主張は封建制の見地からすれば納得できるものである。なお、Snorri によれば(*Edda Snorra Sturlusonar*. Guðni Jónsson gaf út, Akureyri 1954, 200), デンマーク(ノルド)語で hersir や lendr maðr と呼ぶものは、ザクセンでは greifi そしてイングランドでは barún と称するのである。
- (5) Hákon のサガはもっと直接的に、「スノッリはアイスランドを王の支配に入るようにすること」と語る(*Hákonar saga* §59)。
- (6) 「しかしスノッリは同国人に対して何事も実行しなかった。彼は取りあげて語ることも殆どしなかった。しかし当時、商人達は平和を享受した」(*Hákonar saga* §59)。Snorri の王臣としての怠慢は、彼のアイスランド人および野心的な首領たる立場から考えれば、ノルウェー支配者達の後盾を得て自国における自己の地位強化のためであったとも、解釈できよう。(別の見解としては、Jón Jóhannesson, *op. cit.* 287)。
- (7) 1277年以降の riddari (騎士) に相当。
- (8) Hákon 王は Sturla の支配欲を巧みにあおって彼に、アイスランドでも王あ

るいは一人の支配者による支配 (einveldi) を実現するように勧める。すると Sturla は「王の助言と配慮を得て敢行し、もしもこのことを実現できたら、自分がそれに値すると思うような名誉を王から授かることを期待する」と返事をした。作者 Sturla は、ここで再び王に人殺しを諫めさせている (*Hákonar saga* § 180)。

- (9) エッタ詩「巫女の予言」(*Völuspá*) 45。
- (10) Snorri が何故、嫡子の Jón よりも、向うみずだけが取柄であった庶子 Órækja を愛したかは不明である。ただ彼は、父が苦手とする戦闘を好み、その一方では父と同じく作詩の才にも恵まれていた (彼はデンマーク王 Valdemar Sejr に見えて詩を献呈した——*Íslendinga saga* § 115)。
- (11) Snorri Sturluson の著作家としての生活を語る直接の記述は、ここと既に引用した個所のみで (本稿 I 3, III 1), 我々が更に欲する情報はどこにも見出不されるのである。

IV.

- (1) これは、後続の記述と併せ考えると、復活祭に先立つ四旬節となろう。
- (2) 「王は、ストゥルラは自分が助言したよりも荒々しく振舞っていると考えた。」(*Hákonar saga* § 187)。
- (3) Hákon 王は覇権を競う義父 Skúli に対して、形式的な敬意を表し慰撫するために、従来ノルウェーに存在しなかった hertogi („Herzog“) の称号を授けた。これは、サガの叙述によれば, jarl の上に置かれる (前出注 III (4) 参照)。
- (4) *Hákonar saga* §§ 197—243 に詳しい。

V.

- (1) これと正反対の証言もある (「彼は……スノッリ・ストゥルルソンの殺害に大きな係わりをもっていた」——*Pórðar saga kakala* § 8: *St.* II 15)。
- (2) *Arons saga* § 1 (*St.* II 237)。
- (3) 「フンドラズ」については、拙稿の注 IV: 7 を参照。

スノッリ略年譜

1179年頃 Sturla と Guðný の三男として Hvammr に生まれる。

- 1181年 夏以降 Jón Loftsson の養子として Oddi に赴く (1199年迄)。
- 1199年 夏 Herdís Bersadóttir と結婚し, Oddi で冬を送る。
- 1202年 Borg に移り住み, Mýrarmannagoðorð と Jöklamannagoðorð を獲得。
- 1206年頃 Reykjaholt に移り住み, Reykhyllingagoðorð を獲得。
- 1208年 9月9日 Guðmundr 司教支持派と対した Viðines の戦いで Kolbeinn Tumason 戦死。
- 1209年 4月15日 Hólar の戦いで勝った反 Guðmundr 司教側についたが, 司教を Reykjaholt に招待。
- 1211年 Niðarós の Þórir 大司教から, 他の首領と共に召喚状を送付される。秋 Guðmundr 司教が Hólar 司教座に戻る。
- 1213年頃 ノルウェーの摂政 Hákon galinn に頌詩を送る。
- 1215年 第28代 lögsögumaðr となる (1218年迄)。
- 1216年 Miðfjörðr と Viðidalr の住民の争いを調停しようとして不成功 (Meir の戦い)。
- 1217年 夏に大民会で Magnús allsherjargoði に勝訴して名声を博す。Hákon Hákonarson ノルウェー王位に即くが, 王国の三分の一を Skúli jarl に割譲。
- 1218年 夏に娘 Hallbera を Árni óreiða と結婚させ, その後ノルウェーに赴き Hákon 王と Skúli jarl の skutilsveinn にされる。冬は Skúli jarl のもとに滞在。
- 1219年 夏 Gautland (Västergötland) に Kristín 妃を訪問して詩 Andvaka を献呈。冬 Skúli jarl のもとに滞在。
- 1220年 ノルウェーのアイスランド征討を阻止, Hákon 王と Skúli jarl の lendr maðr にされる。秋に帰国。
- 1220年代前半 Edda をまとめる。
- 1221年 夏に息子 Jón を人質として Skúli jarl のもとに送る。この頃 Stafaholt を獲得。7月17日 Breiðabólstaðr の闘いで Björn Þorvaldsson 戦死。
- 1222年 2月4日甥 Tumi Sighvatsson が Guðmundr 支持勢力によつて殺害される。春 Grímsey の闘いの後 Guðmundr 司教ノルウェーに追われる。夏第30代 lögsögumaðr になる (1231年迄)。
- 1223年 夏の大民会で Þorvaldr Snorrason に追放刑を宣告するが, 後に和解。

Hákon の王位継承の正当性が最終的に確認され、Skúli jarl の要求は否定される。

1224年 夏に、息子 Jón が帰国、娘 Hallbera の離婚及び娘 Ingibjörg と Gizurr Þorvaldsson の結婚、Hallveig Ormsdóttir との財産共有と共同生活を始める。秋に娘 Þórdís を Þorvaldr Snorrason と結婚させる。

1226年 夏の大会会で Snorrungagoðorð をめぐって身内の紛争を起す。Guðmundr 司教帰国。

1227年 春に長兄 Þórðr と共に甥 Sturla Sighvatsson から Snorrungagoðorð を奪う。

1228年 冬に娘 Hallbera を Kolbeinn ungi Arnórsson と結婚させる。Fáskrúð 川以南の Dalir の住民から忠誠の誓いをとる。8月6日甥 Þorvaldr Snorrason 焼殺される。

1230年頃 *Heimskringla* を完成する。

1231年 1月21日息子 Jón が Bergen で横死。夏の大会会で Ormr Jónsson と係争。娘 Hallbera の病死。娘 Ingibjörg の離婚。Guðmundr 司教 Hólar を追われる。

1232年 大会会以前に Sturla Sighvatsson による Vatnsfjörðr の Þrjóðr と Snorri 兄弟殺害（3月8日）に関して調停。大会会で Kolbeinn ungi との係争で有利な和解を獲得し、息子 Órækja と Arnbjörg Arnórdsdóttir 結婚。

1233年 Órækja を Vatnsfjörðr に送って首領とする。甥 Sturla Sighvatsson ノルウェーとローマに向う。

1235年 Órækja 数々の無法を Vatnsfjörðr 一帯で働く。Kolbeinn ungi ノルウェー王のもとへ。秋 Sturla Sighvatsson 帰国。

1236年 3月 Reykjaholt を去って Bersataðir に移る。甥 Sturla に Borgarfjörðr の支配権を奪われる。Ormr Jónsson (Skál) のもとに赴く。Kolbeinn ungi 帰国。

1237年 Bersataðir に戻るが、四旬節には Reykir に滞在。4月10日長兄 Þórðr 死亡。4月28日 Bær の戦い。ノルウェーの支配者達の召喚に従って夏ノルウェーへ。

1238年 冬 Niðarós の Skúli hertogi のもとに滞在。8月21日 Örlygsstaðir の戦

いで次兄 Sighvatr と Sturla の父子等が敗れて戦死。

1239年 夏に帰国して Reykjaholt に赴く。前年任命されたノルウェー人司教が Skálaholt と Hólar に着任。

1240年 春に Bær の戦いの裁定を行う。夏に甥 Sturla Þórðarson に Snorrunga-goðorð を分与。5月24日 Skúli hertogi 敗死。Árni óreiða 等 Hákon 王の密書を携え帰国。

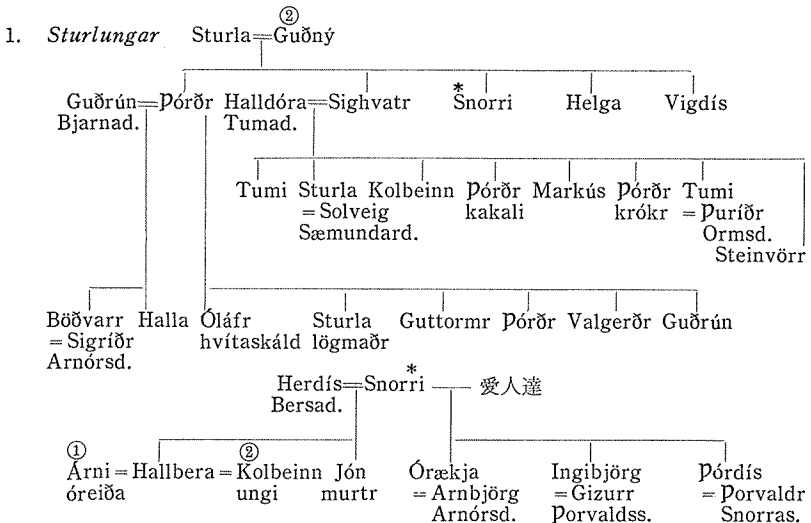
1241年 冬に義妹 Þuríðr Ormsdóttir と甥 Tumi Sighvatsson の結婚式を行う。7月25日妻 Hallveig Ormsdóttir 死亡。9月23日夜 Gizurr Þorvaldsson の手勢によって殺害される。

1256年 北部地方住民が Hákon 王への貢税を承諾。

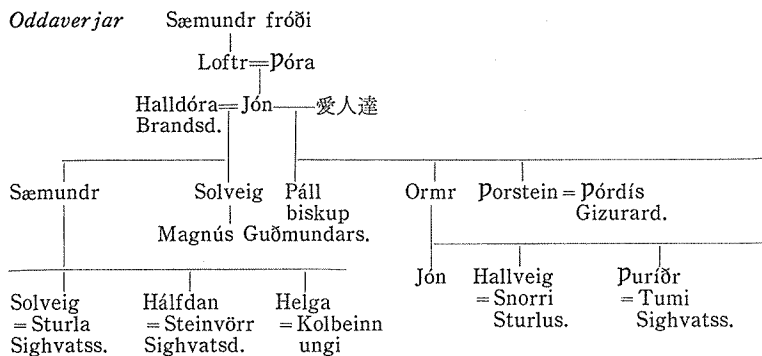
1258年 Gizurr が王の jarl として帰国。

1260—64年 各地の農民が Gizurr jarl と Hákon 王に忠誠と貢税を誓約（アイスランドの独立喪失）。

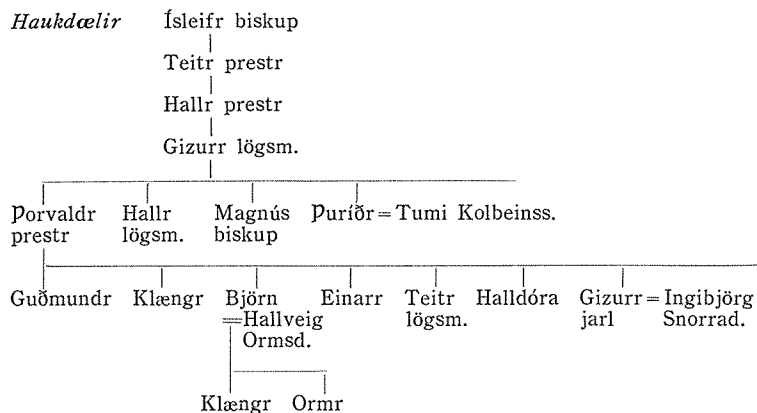
諸家系図



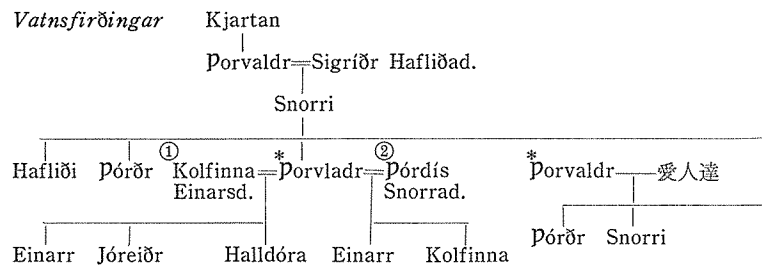
2. *Oddaverjar*

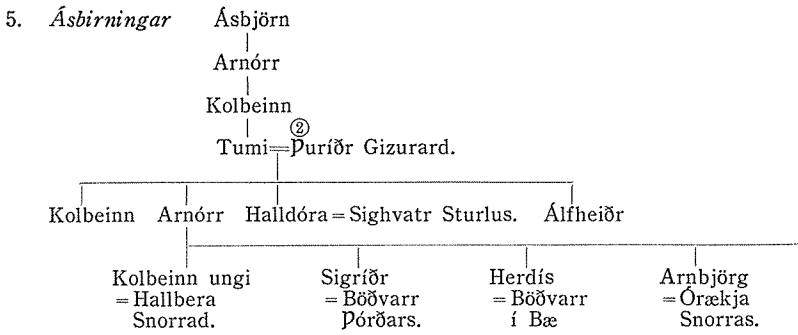


3. *Haukdælir*



4. *Vatnsfirðingar*





(注)d. =dóttir,s. =son, lögs. = lögsögumaðr